



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3654 号 2017.5.16 発行

視覚障害者でも手で触って識別できるバッジ 東京五輪・パラ



NHK ニュース 2017年5月16日

東京都は3年後の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、目の不自由な人でも手で触ってエンブレムを識別できる新たなバッジを作成し、16日から配布を始めました。

新たなバッジは東京大会をアピールするため都が視覚障害者の団体の協力を得て、6000個作成し、大きさは通常の1.3倍あり、表面に凹凸をつけることで、目の不自由な

人でも手で触ってエンブレムを識別できます。

16日からの配布に合わせて、小池知事が都立文京盲学校を訪れ、パラリンピックの自転車競技で、目の不自由な人と先導役による2人乗りの「タンデム」について学ぶ授業を視察したあと、生徒の代表2人にバッジを渡して、胸元に着けました。

視察のあと、小池知事は「小さなことかもしれないが、配慮することで、みんなで東京大会の機運を高めていきたい」と述べました。

都は今後、目の不自由な人の団体などを通じて希望者に配布するほか、特別支援学校の子どもたちやパラリンピック競技のアスリートにも配ることにしています。

絵本 はらぺこあおむし 誕生秘話



NHK ニュース 2017年5月15日

幼いあおむしが、毎日おなかをいっぱいにしながらか成長し、美しいちょうになる様子を、色彩豊かに描いた絵本、「はらぺこあおむし」。アメリカで最初に出版されたのは、1969年。以来、世界の63の言語に翻訳され、累計発行部数は4400万部にのぼり、世代を超えて親しまれています。日本では、1976年からこれまでに750万部が発行され、いまでも、年間250万部以上が売れる異例の作品となっています。

その「はらぺこあおむし」を描いたアメリカの絵本作家、エリック・カールさん（87）が東京で作品展が開かれるのに合わせて、来日しました。長く愛される絵本がどのように生まれたのか、カールさんにその秘密を直接たずねると、鮮やかな色彩に隠さ

れた、意外な「原点」を教えてくださいました。(科学文化部・黒瀬総一郎記者)

親近感ある話を色彩豊かに

絵本「はらぺこあおむし」は、幼いあおむしの成長を描いた物語です。

生まれたばかりのあおむしは、りんごを食べたのをきっかけに、毎日、おいしいものを、たくさん求めるようになります。

すもも、オレンジ、アイスクリーム、ソーセージ、カップケーキ。食べ過ぎておなかをこわす失敗も。そんなあおむしも大きく育ち、やがてちょうになります。



親しみのもてる物語と、鮮やかな色彩が、子どもたちの心をつかんでいます。

色彩の豊かさの「原点」は

鮮やかな色彩は、カールさんのほかの絵本にも共通した特徴です。

なぜ、こうした鮮やかな色彩を使うのか、カールさんに尋ねると、意外な答えが返ってきました。

その原点は、戦争体験にあると言うのです。カールさんは、「私は戦争を経験し、悲しい時代を過ごしました。そのときの悲しさを、絵本を通して、喜びに変えているんです」と話しました。

色を失った時代

1929年、アメリカで生まれたカールさん。野山で遊んだり、絵を描いたりするのが大好きな子どもでした。

カールさんを取り巻く状況が大きく変わったのは、6歳のとき。両親のふるさと、ドイツに移り住みましたが、その後、まもなく、第2次世界大戦に巻き込まれることとなります。



ドイツのナチス政権下では、市民生活もさまざまな形で抑制されました。街なかの建物や人々の服装から、色もなくなっていきました。

当時のようすについて、カールさんは、「爆撃機から目立たないように、家は茶色やクリーム色に塗り替えられていましたし、街では、鮮やかなスカーフや服を見ることもなくなりました。すべてが灰色だったんです」と話

します。

そうした中、カールさんが12歳のとき、美術の先生が見せてくれた絵画の鮮やかな色が、心に強く刻まれたといいます。カールさんは、そのときのことを次のように語りました。「当時、ヒトラーは、ピカソの抽象画やマティスの大胆な表現を抑圧していました。

私は、ピカソもマティスも知りませんが、ある日、美術の先生



が、こっそり、その色鮮やかな絵を見せてくれたんです。そして先生は、『君は自由に絵を描けばいいんだ』と仰ってくれました。当時はなぜ先生がそんなことをしてくれたんだろうと思いましたが、いまでもずっと、強く心に残っています」。

色彩は自由と平和の象徴

この経験から、カールさんは、色鮮やかな絵を描くようになりました。色が、自由と平和のシンボルとして、心

に穏やかさをもたらしてくれると思えるようになったからです。

苦しい世界から救いを求めて、色彩に目覚めたカールさん。「私の人生には、いろいろなことがありました。私の本が皆さんの喜びになり、学びになり、成長の助けとなることを願っています」。みずからの絵によって、多くの人に安らぎを感じてほしいと優しい表情で語りました。



絵本の「仕掛け」も大人気

カールさんの絵本には、もう一つ、人気を誇る理由があります。

それは、絵本に施された、さまざまな仕掛けです。

カールさんの「はらぺこあおむし」では、あおむしの食べたあとに、穴が開いています。子どもに物語をよりリアルに感じてもらうアイデアです。そして、ページの幅にも工夫が。あおむしが食べる量が増えるにつれて、ページの幅も広がるようになっています。ただ読



むだけではなく、物語に参加している気持ちになれるのがカールさんの絵本のもう一つの特徴です。

「仕掛け」誕生の秘話

こうした「仕掛け」のある本を作ろうと思った理由も、カールさんの生い立ちに関係していました。

カールさんは、「アメリカで生まれ育ち、幼い頃は恵まれていましたが、異国のドイツでは、すべて学び直さ

なければならなかったうえに、間違えれば体罰も受けるようになったんです」と当時を振り返ります。子どものころ、厳しい環境で、学ぶことに苦勞したカールさん。

より分かりやすく、子どもが夢中になれるものと考えて生まれたのが、「仕掛け」のある絵本でした。取材を進めると、実は、もう一つ、「仕掛け」絵本の誕生に隠された秘話がありました。

「はらぺこあおむし」が、1969年に世界で初めてアメリカで出版されたときの本をよく見ると、「Printed in Japan」と書いてあります。

この本、英語版にもかかわらず日本で印刷・製本されたものなんです。本に施す仕掛けが複雑で、アメリカでは、コストが高くなるため印刷を引き受けてくれる会社が見つかりませんでした。

そうした中で、手を挙げたのが、日本の会社だったというのです。カールさんは、「当時、アメリカでは、本に穴を開けたり、ページを小さく切ったりしようとすると、コストが非常に高くなりました。

私の編集担当者が、日本の会社を見つけてくれて、はじめて出版できたんです」と教えてくれました。本に穴を開けるというアイデアは、生活の中でのふとしたひらめきで、「穴開けパンチで、紙に穴を開けていた時に、本を食べる虫の話を思いついたんです」と話していました。

カールさんは、その後も、さまざまな『仕掛け』を、世に送り出しています。例えば、「ゆめのゆき」という絵本では、フィルムをめくると、雪に隠れて見えなかった動物が姿を現します。

「だんまりこおろぎ」という絵本では、音を鳴らせずに悩んでいたこおろぎが、最後にやっと出せた瞬間、本から実際に音が鳴る仕掛けになっています。カールさんは、「私の絵本はおもちゃと本をミックスしたものです。

子どもは、おもちゃで遊んだのちに、本で勉強することを覚えますが、私は、その橋渡し役を担いたいです」と絵本に込めた思いを語っていました。



カールさんの作品展には、色鮮やかに描かれた絵本の原画や、絵画作品、およそ160点が展示され、カールさんの作品展としては、これまでで最大です。



たく深くて尊い思いを知ることができました。

絵本に詳しい日本女子大学の石井光恵教授は、「カールさんの『仕掛け』は、絵本で伝えたいメッセージを際立たせる効果を持っている。カールさんのこうした『仕掛け』は、国内外の多くの絵本作りの土台となっている」と指摘しています。

絵本に込められた深い思い

東京の世田谷美術館で4月22日から7月2日まで開かれているカール

さんのサイン会では、若い女性が感動して泣いていたり、子どもが自分で描いた絵をカールさんにプレゼントしたりして、世代を超えた人気を実感しました。

今回、カールさんには、特別に30分の時間をいただき、詳しくお話を伺いました。色彩の豊かさは、自由や平和のシンボル。一冊の絵本に込められた

深くて尊い思いを知ることができました。

東京・原宿に花屋とカフェ 障害者らが働く店オープン



福祉新聞 2017年05月16日編集部
店への思いを語る福寿代表

障害者を採用し、花などの植物を通じて人材育成を行う一般社団法人「ローランズプラス」(福寿満希代表)は8日、東京・原宿に花屋とカフェ「ローランズ social flower & smoothie shop」をオープンした。日本財団が開設を支援した。20人の障害者が交代で働き、賃金は月13万円を目指すという。

約23席のカフェではスムージーやオープンサンド、スープなどを販売する。障害のあるスタッフは主に花のアレンジメント制作やスムージーの提供、接客などを行う。

定休日はなく、営業時間は午前11時から午後7時まで。

福寿代表は「働く女性を植物の力で応援することをコンセプトにしている」と店づくりへの思いを語った。

統合失調症を患い、将来に悩んだこともあったというスタッフは「ローランズの仕事は夢であり希望。仲間にもまれて仕事ができることに感謝している」と話した。

児童福祉関連法案審議入り 子どもの保護に司法の関与強化

NHK ニュース 2017年5月16日

増え続ける児童虐待に対応するため、子どもの保護の手続きに家庭裁判所の関与の強化などを盛り込んだ児童福祉関連法案が、衆議院本会議で審議入りし、塩崎厚生労働大臣は、手続きの適正化が確保されるとして速やかな成立に理解を求めました。

児童福祉関連法案は、虐待や育児放棄などを理由に子どもを保護者から一時的に引き離す「一時保護」の長期化が課題となる中、手続きの適正化を図るため、児童相談所が保護者の同意のないまま2か月を超えて保護する場合は家庭裁判所が審査することなどが盛り込まれています。

法案は16日の衆議院本会議で趣旨説明と質疑が行われて審議入りし、この中で、塩崎厚生労働大臣は「司法介入の強化などを行うことで虐待を受けている子どもを適切に保護するため、法案を提出した」と述べました。そのうえで、塩崎大臣は「家庭裁判所の審査を導入することで手続の適正化がより一層確保されるとともに、一時保護の長期化の抑制にもつながる」と述べ、速やかな成立に理解を求めました。

医療的ケア児の親 働く場...名古屋にチョコ店



預かり施設を併設
医療的ケア児を持つ親が、
子どもを預けながら働ける
1階のチョコレート店(名
古屋市名東区で)
親が働いている間、子ども
を預けることができる2階
のスペース

たんの吸引や栄養注

読売新聞 2017年05月16日



入などが日常的に欠かせない「医療的ケア児」の保護者が、子どもを預けながら働けるチョコレート店が今月、名古屋市名東区にお目見えした。半田市の社会福祉法人「むそう」が運営。2階の通所施設に子どもを預けて、1階の店で働く仕組みで、障害を持つ子どもがいる世帯への新しい支援のかたちとなりそうだ。(長尾尚実)

店舗は1階に、豊橋市の障害者施設から生まれたチョコレートブランドを扱う「久遠チョコレート名古屋藤巻店」、2階に「チャイルドデイケアほわわ名古屋星ヶ丘」が併設されている。

木目調のおしゃれな店内には、ドライフルーツやナッツを混ぜたいろいろなチョコレートが並ぶ。

「お一ついかがですか」と接客やチョコを製造する名古屋市の青谷彩さん(35)は、2階の施設に長男の健大君(1)を預けながら週3回、パートとして店で働く。健大君は生まれつき体が弱く、たんの吸引が日常的に必要な医療的ケア児だ。

青谷さんは夫の転勤で、同市に引っ越して出産。健大君は生まれてから4か月間入院していた。容体が安定し、青谷さんは再び働こうと、健大君を受け入れてもらえる保育園を探したが全て断られたという。知人に今回の施設を紹介された。

久遠チョコレートは豊橋市の一般社団法人「ラ・バルカグループ」が2014年からブランド展開を始めた。障害者が働ける場所を作ろうと、同法人の夏目浩次理事長が障害福祉団体などに協力を呼びかけて、チョコの製造や販売を行う店をフランチャイズ形式で全国各地に開設。販売店としては豊橋本店を含め11店舗目で、名古屋市には初出店となる。

また、2階の通所施設には看護師が常駐し、子どもが遊べる部屋の他、おむつを替える場所や浴室を設けた。医療的ケア児は一般の幼稚園、保育園で受け入れが進んでおらず、母親が働きたくても働けないケースが多い。施設全体の責任者の徳田優太さん(35)は「子どもの障害が理由になり、母親の社会進出が阻まれてはいけない。子どもの近くで働ける場を用意することで保護者の負担も減らしたい」と話す。

運営が軌道に乗れば、今後、1階にカフェスペースを設けて、医療的ケア児の母親をさらに雇用したり、障害者の働ける場にしたりしていく計画という。徳田さんは「医療的ケア児と、その家庭がより良く暮らせる一助になれば」と意気込んでいる。

名古屋藤巻店の営業時間は午前10時～午後7時。月曜定休。問い合わせは同店(052・781・4898)。

アルツハイマー病診断が向上 症状なくても早期に発見 4月の国際会議では認知症の最新の診断法などについて話し合われた＝京都市の国立京都国際会館

産経新聞 2017年5月16日

認知症の中で最も多いアルツハイマー病(AD)の診断が、技術革新によって格段に向上している。4月に京都で開かれた「第32回国際アルツハイマー病協会国際会議」では、症状として表れない段階でも脳内の画像によって診断できることが報告された。発症までに25年以上かかるともいわれるAD。早期発見で進行を防ぐな



ど、効果的な治療計画の策定に生かされそうだ。(坂口至徳)

◆認知症国際会議で

国際会議では、「認知症の最新の科学」をテーマに全体会議を開催。オランダ・アムステルダム自由大学医療センターのフィリップ・シュルテンズ教授(認知脳科学)が、110年に及ぶAD診断の歴史について説明し、「治療は『治癒』まで至っていないが、実現するためには確度の高い診断が必要」と強調した。

ADの発症原因は、脳内に「アミロイドβ(Aβ)」や「タウ」と呼ばれるタンパク質が

沈着し、脳神経細胞を死滅させるという仮説が一般的だ。

ADは、ドイツの医師、アロイス・アルツハイマーが妄想や記憶障害が進行する女性の治療を通じて、1907年ごろに発見、報告。患者の死後の解剖により、脳の神経細胞が変化し脱落するなど特徴的な現象があることが分かった。

しかし当時は、生存している患者の脳を詳細に調べる技術はなく、臨床医が診断できるようになったのは、84年に米国立神経障害・脳卒中研究所などの診断基準が発表されてから。妄想の有無や記憶障害の度合いなどを基準とし、脳腫瘍などADとは異なる原因の病気を除外して診断するようになった。

◆「PET」に期待

シュルテンズ教授によると、90年代に入ってから脳科学研究の技術が急速に進展し、診断の確度も向上した。脳内の画像が得られるMRI（磁気共鳴画像装置）によって、脳内の記憶をつかさどる海馬（かいば）という部位がADでは萎縮しており、その程度が大きくなるほど進行していることが分かった。

海馬の状態などを調べることで、記憶障害が少し見られるだけの症状でもADに進行する可能性が高い「軽度認知機能障害（MCI）」を早期診断できる可能性があるとして説明。

シュルテンズ教授は「さらに大きな期待がかかるのが、PET（陽電子放射断層撮影）という装置を使った診断」と指摘。放射性物質を静脈注射することで脳内の物質の動向や代謝が分かり、Aβなどの蓄積の状態や脳の機能変化を調べることによって、客観的な診断がつく可能性が出てきたという。

◆リスク回避に役立つ

このほか、脳脊髄液に含まれるAβ、タウタンパク質を調べる腰椎穿刺（ようついせんし）という方法も紹介。妄想や記憶障害などの症状とは切り離れた形で、生物学の指標であるバイオマーカーを手掛かりにした測定技術が広がっている。

同教授は「ADの症状が明確に出ていなくても、バイオマーカーの変化や海馬の萎縮の測定などにより早期にリスクが診断できる」と解説。「健常の状態からMCIを経て発症に至るまで連続して追跡でき、ADの進行を遅らせたり、リスクを回避したりする手立てが立案できるようになる」と今後の展望を示した。

さらに「がんの治療が、がんの種類や患者の病態に合わせて個別化することで進歩したように、ADの治療も個別化できるよう診断技術を高めていきたい」と意欲をみせている。

睡眠障害の症状抑制、オレキシン使用薬作成し効果確認 筑波大チーム

茨城新聞 2017年5月16日

日中に強い眠気や脱力発作などに襲われる睡眠障害「ナルコレプシー」について、オレキシンという物質を使った薬が症状を抑制する効果があることがマウスによる実験で確認されたと、筑波大の研究チームが15日、米科学アカデミー紀要電子版に発表した。ナルコレプシーの新たな治療薬につながると期待される。

ナルコレプシーは、日中の耐え難い眠気や、感情の高まりなどによって体の筋肉が脱力する発作を起こし、患者の生活全般に深刻な影響を及ぼしている。

筑波大国際統合睡眠医科学研究機構のグループは、神経伝達をつかさどり覚醒を維持するオレキシンという物質を使った薬を作ることに成功。これを使い、正常なマウスに投与する実験を行ったところ、覚醒時間が延長されることが確認された。連日投与した場合は、ナルコレプシー患者に多い体重の増加も抑えられた。筋肉が脱力する発作を人為的に起こしたマウスに投与すると発作が抑制された。

柳沢正史教授は「将来的に病院治療薬として使い、経口で効く薬を作りたい」と述べた。うつ病の過眠症や、薬の副作用による過剰な眠気などを伴うほかの睡眠障害を改善する創薬にもつながるとみている。（綿引正雄）

介助犬との生活 知って 七尾 医療福祉専門学生に講演 中日新聞 2017年5月16日



介助犬のタフィーと並ぶ平野友明さん(中央)＝七尾市の国際医療福祉専門学校七尾校で

介助犬と生活している平野友明さん(48)＝金沢市＝が十五日、七尾市の国際医療福祉専門学校七尾校で、普段の生活ぶりについて講演した。

講演会には一年生の生徒約五十人が参加した。平野さんは二〇〇九年、仕事中に屋根から転落して脊髄を損傷し、体が不自由になった。落ち込む気持ちもあったが入院三日目から「笑って過ごしてやろう」と前向きにリハビリに取り組み、一人での外出を目標に掲げた。

在宅復帰後、福祉関係者の勧めで介助犬のタフィーと出会い、自立のために一緒に生活している。平野さんは

「タフィーのおかげでできることが増えた。皆さんも介助犬の存在を覚えておいて、将来出会う患者さんに教えてあげてほしい」と呼び掛けた。

講演後には介助犬との生活のデモンストレーションを実施。鍵を拾ってもらったり、かばんから財布を出してもらったりした。

作業療法士を目指しているという神庭あゆみさん(30)は「実際に介助犬と生活している人の具体的な話が聞けて良かった」と話していた。(武藤周吉)

佐賀のひきこもり、男性7割が中高年...長期化も 読売新聞 2017年05月16日

佐賀県は15日、ひきこもりに関する実態調査の結果を初めてまとめた。

学校や会社に行けないなど、社会的参加が6か月以上ない人は少なくとも644人で、このうち7割超が自宅に3年以上ひきこもっている実態が浮き彫りになった。

調査は1～3月、県内の民生委員・児童委員2105人にアンケートを行い、このうち1457人が回答した。回答率は69・2%。

調査対象は「おおむね15歳以上」で、ひきこもり状態にある人。内閣府の調査では「39歳以下」までが対象だが、県の調査では「40歳以上」も対象に加えた。

結果によると、該当者のうち男性は389人(60・4%)、女性は165人(25・6%)で、無回答は90人(14%)。男性は40歳代が最も多く110人、次いで50歳代が87人、60歳以上が77人で、中高年層が71・3%を占めた。一方、女性は60歳以上が65人と突出し、10～50歳代はいずれも10～20人台だった。

ひきこもりになった原因(複数回答)として、「疾病や性格など本人の問題」が197人と最も多く、「家族や家庭環境の問題」(112人)、「失業」(107人)、「不登校」(71人)、「就職できなかった」(38人)が上位を占めた。

期間は「10年以上」が最も多い232人(36%)で、40歳代(66人)と50歳代(57人)が中心だった。県障害福祉課は「中高年層でひきこもりの長期化が見られた。今後、結果を基に施策を進めていきたい」としている。

県は15日、ひきこもり地域支援センター(佐賀市白山2)を開設した。平日の午前11時～午後6時、臨床心理士らが相談(予約制)に応じる。

武雄市武雄町昭和のサテライトでも月、水、金曜日の同じ時間帯で相談は可能。問い合わせは、同センター(0954・27・7270)へ。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

